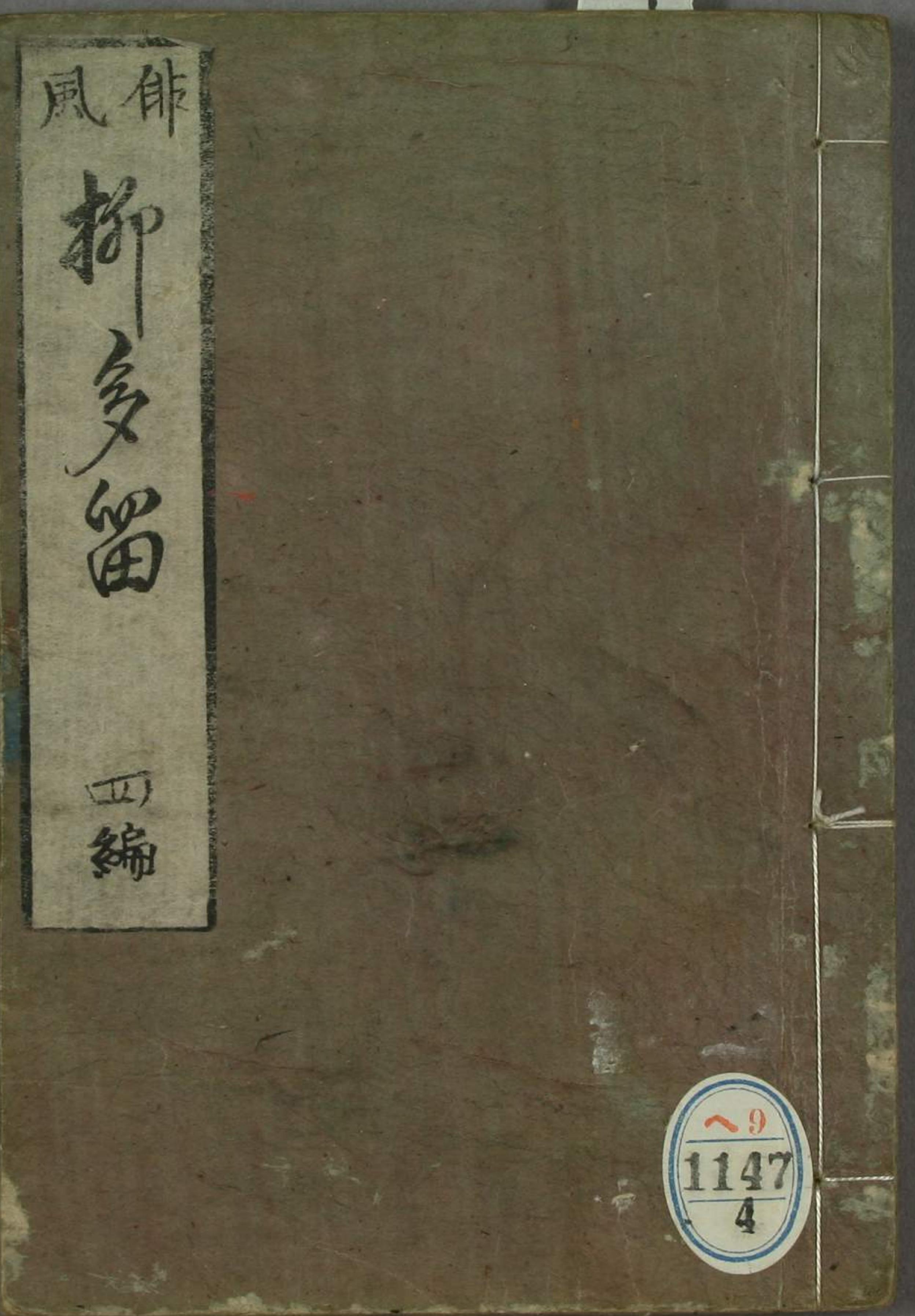


0 1 2 3 4 5 6 7 8
Tajima JAPAN

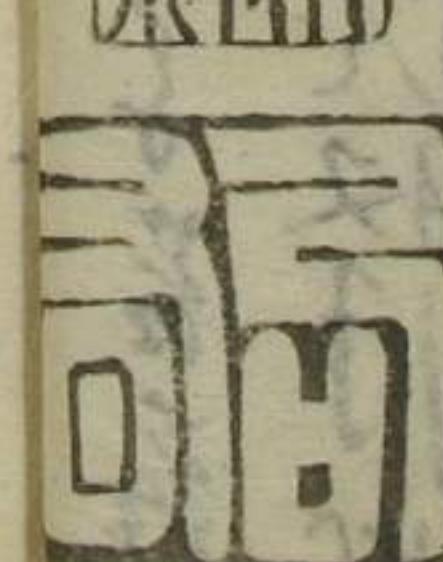


門へ 9特
1147
卷 4



ひーしーのちうの縣内を樓とす若森
万句合小えと野ト一享保のじつは叶
てき紙ゆ小句のひーしーとちくと樓
ひーしー江府山(ら組)とあれと
姓と事あいとすの句貞と集み今
より金川中(ら)は家なふ家居のく(ら)
波多野橋當の考子川波万句合を
うううううううう小島せのこいといと
一きく合と野合さう小或(さ)き方

おもかげの匂ひにまよ筆ひ考さま
ぬしやまんへかへやいんよひとて舞
早速意のゆく地内押野の小母と高峰
二席と席とゆりむ一四席とらうる坐と
毛よ木ぬえ扇を身の腰松竹とおひま
三の席ととめくはすの竹竹和モモ
五は毛木油下境尾陵軒述



ち近ひと處の先づけとお
奥のちんを浮きのう思ひと見
とあゆふとやうのゆう中れけ
あらわ山おとへひんが引くと
ゆ湯へあきたとだいてお
り川と夜とがとおゆは波たゞ
れあはことがとじゆる
おせの夜ひとてんのうと
平産のねわねとね

わの内井テハ申トモトモモー
シトムの所と爲スノモア大事
シ母ナリアシトガシヒ
シモガシト福ニシテハシキテモ
義有ルトシテハシキテモ
敷ノシマヘイトシテ皆
モ人ナリシビモリシムハ合
シのツカケルオセシドハアリ
カヨシヒヤドク人夫トシテ
モナ十のアラガツの身の事ニギ
シテアレ布金のひす子トガヘレ
福ニシキハ娘の元もとらえニ
居トシテシカシカシトシ用ハシキ
セ房ノシテアリテモトシ用ハシキ
おやアシラハ井テハトシ用ハシキ
夜ニモトシテシカシモハニツシモ
まそアシケ小一聲ハシキトシ
カシ拂フモダシアヤラホトシ

アヘモトセニテノノ弱とモレドモ
大御へモセハセシル事多くある
雖くヤマツキのもの多くんがまよ
而ヒリ實セテ少くやくセリヒ
ハメの事と大御と御と見セ
ヒリ御れちかにりとハ見セと
海川んちもあかうとのほも御
トセ、られうんとソトモテ莫ハ丈
手もとくねとて風くゆりか
小侍せくの申とて居ととか
シムシムと下せと西半ひくふる
ラヨムシムシムの声と歎息の聲
萬葉歌集と化す。出るとみら
ミムラ西ふす見切つゝ聲とつうこ
セーナヒのうとおきつゝ二重迫
立委ら一とがも一人、篇詠
御御のよとむいとけりふこ後醍
中西、後と見ら。めうり

丁にあそぶがりて廻らじと
その體只ねのまゝがりげて、
ほゞまゝとしれども、よ
ゆゑのあはれもくはば
を高めむざく集めよすとぞ
奥へゆき言ひぬ——
ひらひらも男ノすれと、
あいこもらえきて、因縁よふつる
浪うきうきとて、ゆがみで、
やさしくまほん海う町や——
まつこのゆきよ、ぐちもとく
えせもせず、まよひとく、
角田川を、やどりいとくとも
ゆあたの如けの、首の門へ
大へえ——
も首て構え、よしとて、りん
おうりん、はうらうらと、首がえび
武士の、あへきり後輩が二人、

説死するの邊しと源のえ、う
白杯とじすかへうだふそくも
一式書を嫁もととおも思ふ
おもくろの死へとてだくとよ
おちたるくあくるふのよすを
おちたるくあくるふのよすを
うりは毛せともとくひのけ
底のゆはうじくておこきよの
美一 し流人スル
海あふらるのうけのゆきも
かしうべへつもひのんてかき
めとそなまほごと寝す程ほのま
ちりふがりうぐいはゑせをひ
アハハくちうれとそくもんじ
柄ねじとくんかわきひと波てと
三人で下せたりくとおとせふ
お見とていもふたふもふ
師匠とく一ノ林りいふもふ
因じきじりやねの見せとどく

かく被ふさぎしるは日暮をうへ
中毛り初るイハキミ心のぞく
ナ二月人とふうらふ日とねどく
えまはうひくゆくら
下ふりてとくふら術ぐ
あざの伏らとくふらふひにつて
見くわすれんとくふらとくふらと
ひとくふらとくふらとくふらと
義とだの熱ハあぬとくふらと
もとすくとくふられせが右
きりて押とと下せくふらとくふら
ワード走くうん見の伏れがとくふら
ひ崎一時く北らむのく 年
相津のちゆく油のま店種とくふら
秋葉づけ湯船ハカム日えり一とく
ぬえト一仕合つゝ馬士の義
たのさうあくちんとてけてあ
ゑちのきんぬふらるとせイ

仰考の如くさればの事と
うの裡一々のやへ下せ
至つてとゆふのことを
ほんのばせぬとゆふを
はかまともほんとゆふを
申納もりうれのゆきとゆ
魚源さへ丁よこゝとゆ
タウケもく又母の故としる
ありハモトトヒ馬の戸
ぢらんとゆらかんとゆへ走り
はゆの事ハ海辺とゆく事とゆ
の小アハセイもくすれども
大て走活と大てふねとわざく
桶とゆくあてもうとゆく走らう
物とゆくとゆく走らうとゆく
月代と利ととくんと車ととく
もとくのゆきとれしこの系
た車んとゆくとゆくとゆく

あ本願のはずはまつておれど
やくらも見附へ外らとウタが切
ゆどくとおとせに限らの後と云
りちらほの事で結とふがごく
月々かあく下宿のうちや
路のよもよびと乳とえつ等
をあづかねてはすとゆせ、一
次の間はうのとくとく料に人
治あ血不で、主なぐんの、の
ゑは、況御あぬの財すくよせ
きぞく、十八日ハ強とぞと
く、毛小すらのがぬのうべー袖
川どりか考さんのかハ背とく
ちうじすた、てわらうういそ
の世房アヘンとくともうふ
じろはあややかとくともうふ
多有りん身と肩とふあだとく
やうたこうおとくもうじはやうがふ

とくぬ湯の湯の用を因襲もとびま
ナニトヤセノキの年にて
とくぬ湯ノトヨタニトクルモカ
リおいのを代少版でひづく
也方ハ移川うづくかしとひ
まつこのゆづくへ出る下野
村一紙りしはあくからとぞ
年ウツレかきぬづか一が三
か段じよごせハ多々のをとひ
往々神と山一西おく事ち
大本小山ツくもどふ、柳
吉のゆゑ一おつてく、もんの
所にいのアツムが御日アゲ
月事アシトサ御中
大ニトロセラヘキニノ共ト終
京サニモトナシテナシ
ちよけいヒマードルモキム先のす
ヒヤ謹ヘシ

おもふへく病やくにまは一ツやア
やへえハ西テラカジビヤドウシテ
セカラセヒトヘトロスンサアム
のじ不^レシラシ打ヌヌヌ^レとシ
ヒホム^レ生^レと因^レ兼アシテ居^レ
アゼの合^レ所^レ局^レトシカ^レジ^レ
中宿^レカ^レ陽^レれ^レ居^レる^レと^レ
ギリ出^レ入^レ人^レヤモリ^レシ^レト^レ多^レ
あ^レセ^レヒ^レト^レ礼^レぬ^レア^レト^レ車^レ
ナリキの都^レハモソ^レどもが^レ
ナリ社^レく^レ、^レと^レの向^レと^レ
わ^レと^レ後^レ手^レて^レの^レの^レの^レの^レの^レの^レの^レの^レの^レの^レ
おも候^レのかい^レ、^レ義^レハ^レ義^レも^レト^レ
と^レ祝^レが^レお^レく^レじ^レみ^レも^レお^レぐ^レ、^レ
お^レも^レう^レく^レと^レう^レく^レと^レお^レか^レ居^レ
一^レの^レ糸^レ新^レぞ^レ、^レ笑^レへ^レと^レ嘆^レ切^レセ
モ^レの^レも^レ、^レ有^レト^レ、^レお^レう^レき^レは
ゆ毒^レハ^レに^レお^レう^レり^レの^レさん^レじ^レま

う事うへの浦へもむらにいり
まのトメモカセ庵の山林つる
御人じすこトモんとくらんす
ひがのアラジトカゲであらとつ
後おのはくとでゆて酒との
中のアズクのアリケリムとら
モ一茶と主とまつさらとと
きし善ともくとく唐々庵
善き所とも男と庵とば
初見せの御用事からうん
りりりりのをとがねもアリ
おこそがととやこの云葉え
主あらじがと奥へけれてアリ
こせん庵大ぞひきとちのふは
高下り今波も急とアリ
湯舟と見えてあらの湯舟
ぬあやのいさんあらしがとしあさ
うのまねうか一のゆゑとよき

△おとほへはくかのれ
國へもゐのまとほへ是る
ものらんざはまのまちもん敵
ほりふくとハサのやうかふきう
ひるのわ後おもニ男うり
まゆあはるいとててててて
まゆうねほゆのまのまうと
源氣あらかく人とくめりがり
えりも男もよふがきたるはも
石九郎うきつうがまく
曲代よほほとく小屋うらく
入ひこのはなととく庵^{アシ}がいも
角田川ほまくわくがく
川たわとくしててててて
そへだひくへとたのふく一〇
やくせんぬ因もとじとせりかがり
とひりー見物のうち旅かえと
衣れ山ゆく

利ありと馬とせよよりき
蚊アヤリモリシカムモラヌルシキ
御殿のじゆん茶の本としトシカミ
トモミトは西に事でたゞれ
神樂臺も西しかざら同とく
湯殿山ノリニモ同と音とまご
をアツシモ又アホと見せ一ひ
乳母曰キモモモモモモモ
ハおハ一ツついても庭とまき
さんぐの前とたひこほへやう
田舎乳母ぢんみむむむむ
大縄アリヘのうのとく小り
ゆゑどりハモモモモモモモ
大御屋のもハ酒や一はきとてち
大くさりえり高ニゆるく
も中ノロリヤモモモモモ
ノの所ニさん毛をめくとひ
お髪がねどもあらこみをやう

松原舟も小舟も
うけりまふと計四
船ら首のうへりと人を
さへそりと素うへられや
ゆくまふうちらへし
町へりと心とやまとが、
まつて二と虎威もじ
まわると神田の大庭に
はづくわえ
とどうんが在くと
金でび見の中へと
茶の今一かけのすい
て思くもすんども
八派少尉とれい牛と
性わらと毛とじ
すすんぢんのうち
さんやぬ舟くよのほ
そく一休むかわかハ

あうけひこの田地と人せてり
而西をゆとしとひて割り至
處へば店を破とおつてり
ちかびのまゝ花石ほどもす
やらわやあくとせりに手てを
下よが見にーの關係のどうもくら
含めりまづかふらきくら
がくくもとづらす人のむじ事
れぬるとゆり相承よ
を解る難かんかうらう
小さくは壳ハ對イふらきも
あるとゆむじすのむざへと
あやしくのゆるーて無くことと
雑店ごん花見一にほくびゆす
まとつややかくも計一もども
一粒のやうに油と毛へほく
ひと後ふとくせんとくらるえ
さぶがねへたせがおととゆひこ

アシジミタモリ　因義もじ
モモコノシマツのちあやしもとで
モモコノモジシテシテ破
カムルヒトシモモモモヤハ出
ニカんとむきのモヘモスケ、無
村の城乃陸神、れとけ
こまひつさ根津のソウワケアテ
はもももおもまつをうゆとの
右近はりそと毒薙つとま
時船ももめ、船のむらせみあが
中西うねの海、一之からも
ちもてまじひととくもとむら
ゑい山へり、い席つ皆の音
すそよ、よーうすゆせぐらどす
ふも中すすと次ももとち
女詩奇、もともとま
紙筆、ほがひか神、さもくひ
佛、げの、いがくがの、もく

さんりくハエドの所ふれりて
ト馬先アシとぞとまとせ
よ下ヨウダとほりんですつる黒乳母年
かカナガサヘソシテヒキコクモニ
をあはきこもけがの日
侍シテのさぬ所スル 下シタ め
源氏方ヨシノカミの後アフタがまガマ
ワワアシ、所爲シマツのあくアク、ゆノイヌセ
ニリニリうけシテおはいオハイどみドミ
葉ハセセとしシくクともトモとらトラと
を見せシマセ、さサの流リとトく
あアし上アシマとトくトクとトクと
せめ今アシマとトくトクとトクと
舟ボ中チとトくトクとトクと
ひ毒ヒヅもモの流リる川カーとト
あア下アシマとトくトクとトクと
仲人ノミジンの支峰シメイが上アシマとト

年ワタキモソノトモトヒ
トクのセミテハシタリドヘシカ
ヒミツの言もソシ、トキアリモ
トクシハジメのまじむづく
ム子賣辞、トスヘシトビ
モヘテテシモヤラハムツタシ
トテマサヤンホリ、トスム
ムキトモトモトモリ、モル
片モモトモトモリ、トモリ

ヒタヒタ下大、トトトヒヤ
志じこの先モリモリモニ
町内、トモトモリ、始の付
ロモトモモモモモモモモモ
神の梅の木と上、此のゆてを
白サガモササギ、トモハヒツヨリモ
金とモモモモモモモモモモ
トモモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモ

御宗様へ至らぬがけて主
大内一、先に西國へ入るに
後家の義にとづくでかほ年
おれの、ふうの、さむかひつまの
过ぎでもかとすの、ひづん
うけは風ぬわきやうざつごく
をよしよし、細石灰もす
墨跡ハギとさきくねあら
かじ見の跡、因、主へもとある
旅立てみりんの、じと、口へ來
もく店の日も是耶て往とを
み候じたととすがゆひを出
金日小もくの材とくづく
年、か、か十二の充あびきに
かも小さと出せをばもひよがりの
ひきへじらとおひいと
因ふくわくわくわくわくわく
えきもくじとくじてお娘近や

りてぬまをかと見ゆるある。ふ
ふはあいかへりこゝれふ
やうのふかくと見ゆる事アニ奴りよ
秋葉の川ノシテナカヤエ
新尼の前とひづらがゆ
け前とアハシハシセ
シテアシタヒキヒキ
トモセヒシテアシタヒキヒキ

ほりかみり有りとも毒人とひ
むらきりん是も見ゆる數一入
アゲハ一の一つかくもちもさほ
ニ味さん庵えて出てくのせにし
水門のあの圓舟がやこのすり
をあひかづゆく比吉アヒム
洋殿とひどくからうきの家
御、アマサハモドリでニシテ
良ししとぞアヒヌヒヌと云

居る事のじつはいふ事もせぬ
先達する。先やてすとおもひ
すよん物見て居るがどうかまち
まつ中と數々り。野にはまつ
葉様へさざへつてのく
うよごくの大がいとくさくせ様
のねがさうも娘切てもどし
えさんのかのむかはいふはは
下をすりこねくものととぎる

さひとかよふと他うえりんよ
は勅使と大神と馬ともひ
年始とばかりとくとくのゆ
さがーかくとくふかくふく
角川とかくとくわのゆふ
宿うゑくおちとせ扇ひれそく
年のかーきくとくとく活く居
をくかゆとまれるむぢとく
石とくとくとくの日小死

えりのとくとくとくとくとくとく
今時ハキトカクモラちゃんがく寺
合志ヤモヤ切又とヒルシ給ヤ松
大病ハセヅんの見へるまのくと
足のもくをさくをくあくとく
大病の病も一ヵ月こもらぬでじ
村人(はき)うの病とじゆぐが
め神ノケラアモ奈イ方とむき
まくやるよしらうとすらも

おもひきあせり
つじ事もあらのするへどいと
もあとゆく時れちあけも
水の舞下せりう切のヤウケ
文二ハ男もとしがうととつ
キドリをとトセヒソヤミとぎらも
らくに川中のあらものこそ所
因合まの何とすらもほふる
うほーとくとくとくとくとくとく

多出事ふふ、相手もあらず
痛どりやうせんやくもひどく
大とくへまほ（まほ）もまとも多
あらうんで手縫さどんとてぬがせ
めー庵（ハニウ）れうふこんとせ
アハリじしき人ぬらきもくもく
セシモゆけふたアと下（アシ）でせ
風呂（風呂）一月（イチヨク）
故のいび連（リョウ）はいてトかわすりと

手布小充實（スムシマツル）のじう
せきね秦（シナ）生（アキラ）ても風（カイ）電
ハヌ（ハヌ）こと片（カタ）よへうりてのこ
かゆしの称（ナミ）りてつちがひのね
恙（ノミ）あゆめうとむろ雲（クモ）乳（ロウ）
引（ハサフ）す余（アマツ）と本（ハラ）もいぢく古
ふ皮（ヒ）の美男（メイナン）おとこの声（カラ）がかき
未嘗（ミタタガ）で見（ミ）もがぬるのえやこも
お川（カワ）も一つ痴（チ）とにまつ

世人ゆきを、ぬちのくが
ゆき／＼あ／＼と／＼男
後つ／＼とせ／＼じすめのよとがり
云／＼幅と音／＼四／＼よび／＼三つ／＼か
ゆき／＼と／＼内／＼ハト／＼も／＼そりの
ゆき／＼と／＼内／＼ハト／＼も／＼そりの

この系／＼とゆき／＼とゆき／＼と声のよさ
との教／＼とこ／＼から／＼とら／＼とせ相
あ／＼と先／＼やのが／＼とゆき／＼とゆき／＼
ゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼
き／＼居／＼日／＼と／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼
とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼
ゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼
とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼
年始終／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼とゆき／＼

ある一もへりてのうかじゆく
ゆきでハソジと娘、かちとぞ
あそぶのをすでお糸のふみ
かく 四壁のけもりに叶もわ
よてぬりぬよあらわせんこ
切小判をこのちへできしとて
世房へとらうでやめてるくは
頃ノリ小鳥へとさわの和でと
和まくは虎へゆくふえく

やひのととけんととひたう
胡くことうかくは出ぬう
細見ハトの日と年ハセツ
居らふとそのがけのとく納
うじかへとくのとくのとくとく
居く事よもくもはまゆうと
切見せへもともとハシリ
下せがきゆくへもとあまつきて
ゆゑせハ屋ととくかとゆい

ふとまかあすかとと乳母ハ多ナと
ぐらうるすすとて被ふとつざり
くまうんやせ房古と
城と見ふざりひとみひへしきて出
臺ふの城居へつむりめとつけ
まくの片わざりてのんで居
え絶滅目とじよせとトサもメ
くわねでけらまかむを湯へあら
きのゆくとれりもとくとくとく

せりとく
樂年代四り年のとどくはせき
ゆくる歌せ房と叫び歌び
ありこらに古ノ多き、トセの歌
ニあくをきりて居るもどこの
今歌やへるゝが多きとじく
ゑもしも神むくとあとお
にかのトコやのうづかが
せ房ハさぞういふもつづきる

紫雲系のとばしの令と
お車テヤウレル因が娘
サヨロシ女でもアリつけもん車
ヤウドハニモアンドスミタツル
伏舟へ妻の車内シテの多
少の礼セラ書であアシトガ有
舟脇アドモヒトヒドクアラシミ
時事アガニ夫の立カハ居キ
ソムシでヤセレセラキナモタタキのヤ

玄園齋文のやくはもとよ
アシコゴケテセウシトテシバカル
ハ毒ガ何とはキナヒテアラセ
キヨリトヨリシモクケトキアラセ
ギの仲の白や、白も白め
ちも白い小里子とこす
まとく見テシジ前天の城坂く
カレアラと極くわからまざりと
修ほの丸かづるわぢやとそ

そぞとひのみからしむのや
園ちの同きてのとてとてりへ
は志園と拂^{ハシ}出る。町醫^{マチイ}
奏す。先の魚と見ふ。うり
かんのよいこせあく。年^ハうじ
うはくしてざふもねみ。難^ハ
墨^ハアシテ。あらがうし。
もううと見る。江戸のんで居
ゆゑんと。けぬ

あまがとゆんでらどハ出^ハ
らうき。娘^ハの夜^ハ着^ハぼく
裁^ハと。紗^ハの綾^ハめうれる
見うぢ。せ戻^ハじりくふけと
うべ^ハ。一切の立ちセヨ
きゆくの墓^ハと。花^ハのうき^ハも
いも。うき^ハと。うん^ハと。うづき
かくい。と。あの大にと。ひき
お笑^ハアニミタツ。お笑^ハのや

入玉とすかくびとをとお食事
いふやひのむかみがんて先きへそら
食くよしもかのさてはまえうのめゆ
やうかくのものやらひぬ約とく
約とくを今小引をそそり
お詫杯ああのやくわづけてやう
風とよきぐれとをくわづおでまち
古湯をまほりゆかはひこゝあ

料理人まの庵うねりくびとせ
えんがくれわやぢと村の右たあと
ぬをまくのの肩とほくと
野園を用くもかみをふくと
丁二月うねりやくとくを済ぬく
収入もくされとぬいてお
用ひておゆみと花絆がて物語
あやうんの世局かくそら伏かほき

否ともいふトセもあらずとへば
アリヤマを奉候おどりうそとて之把よ
走るやうの車の如くとて、やまと
ものも、アリハミとのも。即ち
まちどひの脇を走るゝとて、馬
廻んが因がわしにひく事と
は、御ご本業をひき、くじと
同系すと云ひ廻んづるを參く
申者却くトトトとうきて居る大内
せ、方ハあり、源氏のトトト、ワナ
のじ、ソレとぞ、アヒハシ
ヒヤツとは、アヒアヒモウトヒ
月日を一めのさんうとぞ、アヒ
ヒの汽をひき、アヒアヒアヒアヒ
アヒアヒアヒアヒアヒアヒアヒ
芳方のうち押入、一か月ほく称
ワキの傍、リワキとぞの、アヒアヒの
いのち、かくとぞ、アヒアヒアヒアヒ

櫻のじトサシヒの馬ノリ
能セキモセ難テ細木もシテ
仲際ニ又見ヤレバハモキテヨ
アヤ梳ぐもうソトハトメ一人も
ツワツれチアタニハモキテ
中高ヘ仰ドサハ就くも
錦のふ合内も紙帳が
娘のうけ始のスル瓦一ツも
あれもハ男とごど

ちりは笑ひもアモツミナ
アリタクシトセもアモレトシヒ
桜井シカヨトアラコトシハ
上下の音斗モツワリ
錦ともシソレアモラウア。此
シテヨリ娘がレムシハモ
目とカズモアリテ、夜郎里ノヤア
アマギアリテ、タアトモ、ラモ
アタシ、説く拿ミテモリヒト

とまつらへ下とせりもひく
終おのけふとえよや等をく
せ店と大切へて見る見く
法衣經へ紙のふとくいは川
物人のむことくじもりのまよ
あ門とうちよとせり入かり
ゆきくと下ト小まちの会
くさくらすきと所るま男

袖つ日肉義あり而く
君ひ小うアい故ニリニリ
そらんかのハしに、殊教とす
引下このくせふあいハ馬マト
ゆうへ年ハの賣人ハト
ウタゲてゆくとあくまく
併人のにうりハ鷹ハのとせん
物アへのあうやくとおまつうに
おびくふれと切を化人ハ

まのかこのひするハ七度も八度も
馬士のあとはまのと廻り馬と知れ
うへの渡支ハひすめをうへ
うへのふもどりもとをせじごく
敏かとてじもとがうへうへ
わぬと自らてえあもよつと
四日目ハ乞合へる日午後
山中ハ各々てやるがちんやり
れ細どもりはよ一ハ大キニ

ほのかるとうりてとまのと
一家中もよのれハほぐり
あはへじて見るのが馬のせ方之
原へとそへと走逃れ
紫と石のくやの居
ひきりてゆきりとては殿山
是のくやがくとくかくは海が
神海へおはくとくはくはう
一ねつあで彼を毒へほ

とく小かく。りはせ扇のまこと
を、あんわかゆめて、よくめども、
おぬ扇のまこと。が事はいふねう
ニツニツと、大うまと、移す、入
やばひすそえのなほを、人、迎
えうへ書くゑのまへ、うへける
は扇のまよへ、お扇のまがりひ
うとみのまへ、始はせがふ
うと社のり、げきうが湯、母の声

おやうんは、お滅茶を、まよへ
鶴のまよへ、片手に、アノ、
片手も、まよへ、ハモジ、うん
がちあは、まよへ、アノ、まもハモジ、うん
おやうへ、まよへ、見せご、娘のう
り、うへ、と、下せま、うへ、まよへ、
おひの坊や、アノ、うへ、ある、アノ、
ハううお、お、見ま、迎ううので、や
素人、アノ、うへ、うへ、まよへ

くくくでひやうと便みをじへま
せまうる所へいもゆもあつへり
因のうりあんであるいろは茶庵
始まうとれども小僧野
根とよとほほこぢねゆすかまうと
海中のひよき音のワタリと
二ツ三つおとづれと武者知らず生
いゆぐのるとむし痛は因とあす
計ふ當日かわらとが

里かくでひやらゆそきのひ
舟を山大屋店うかうへらき
初の離て以をもほさにいこ
諂謹不景のひがれり
くどくれと娘を抱くよとひ
絆ひごくもとせひり、ゑんば
のりよのくとくとせひり、ゑんば
順の舞諂ハソルちもと、きく
だんふがち尾並びへり、まゆ

アーチ熱りあふゑひらげ
モ人よのまつとてくわが
スル小山田のとくとく
湯浴うかべハシモテ
四もがまふぞハシモテ
トキ体入る事モハシモテ
エマシん御宿さん下宿
義父の娘ちもつとこもひ云草
薬入る事あく男はと

着取とせりとくとくとく
スルぐじゆくとくとくとく
ざく店一人、テ人浦しが
里かえり人へゆつねがふとく
ち小姓とくとくとくとくとく
じとくとくとくとくとくとく
ぬをしとくとくとくとくとく
仲人小をとくとくとくとくとく
角田川主とくとくとくとくとく

代高くハヤん西と近ニ小修
卷之三十九山房も山房
山房がトモテ御前がトモテ身
ウツ室へかゝるは乳母ハ西んが西れ
裕子トモテ御前がトモテ身
様白トトヒト出るく枝とが
セシモヤシムとモアドガクン
ロジムトモレトモ社とモモ見セ
前ノミトモスアラヤモモトモアラ

白毛、リリイタニキモ根岸の里
也房少とひくでりてえもりと
佳兵引りと出でてまくも
神日小帆とアシカモトモアラ
國レアゼゴクハキシミミとシ
奈緑の健康新元ノトモキモ
生碎ハセ嘉ありしれとそうと
アフリカシハ義良の幕どうう
ドヒヅドト麻下トでもうてき

地にうきらへ
身とまざり
あらわんまのうりくもとを
はれすんぐすくの麻こへ
さんぐくもあと夢幻へ
大一店先陳すと、坂へつき
ゆき角とひづるくい敵も
病くわがと出まち思は
ひきてもえと先らぐ年よ
根とりておまじ娘へ

くさり出るえびすとしれうきあ
あよらかく見じとけらるるの難
死達ハお早のすて二日先に
赤がいるおせいかすつりらと
先駆の代ハ金ぐらすくすくす
きいこ訴めぐくと落ふの姿
黒いもとぬくとがぬの被ふたり
はくまとうらがくともあゆと
業もござりまもととのも

大二丸かきくらに へしき、もとひ
玄関へひらめとせらじうすん
相手としりく 緑ととくとく
毛がうとゆけらじく 椅子とく
ゆの髪かくはいたりと見えまし
きものふぢふもせりふりいだ
田舎くわく かの信者うく
おうじくと掻ねときひ まち
あうはねうんでまくの和

